

## 九條邸跡

九條家は、平安時代後期から、朝廷で最も重要な役職である摂政や関白を数多く輩出している五摂家のうちのひとつです。摂政家に生まれた女たちは天皇と婚姻することも多く、大正天皇の皇后、貞明皇后も九條家の出身です（旧名は九條節子）。

九條家の出身者の中でも最も有名な人物の一人が、13世紀初頭に活躍した藤原良経です。太政大臣を務めた政治家でしたが、歌人としてもその名を知られています。多くの歌人を庇護したことで知られており、歌会の主催者としてもその名を残しています。良経が詠んだ歌には次のようなものがあります。

行く末は空もひとつの武蔵野に草の原よりいづる月影

(新古今和歌集、422番)

日本の古典文学は京都を中心として発展しました。京都は山に囲まれた地形です。山から昇る月や、山に沈む月を愛でる和歌は、数え切れないほど多く詠まれています。一方良経は、東国の武蔵野で真っ平らな地平線から月が昇るという、見たことのない光景を思い描いた感動を表現しています。

江戸時代末期、幕府はアメリカのタウンゼント・ハリス弁理公使の要求をのむ方向に動いていました。幕府は日米通商条約（通称ハリス条約）を締結することを望んでいましたが、孝明天皇はこれに反対しました。朝廷と幕府の話し合いは京都で行われ、九條邸も交渉の会場として使用されました。

かつて広大だった邸宅は、今では池のほとりの拾翠亭茶室と、池の中の島に九條家の鎮守社として建てられた巖島神社のみを残すだけとなっています。